

「フクシマの大災害から6年」 ドイツにおける市民活動のご紹介

在欧環境ジャーナリスト 川崎陽子

今年もまたドイツ各地で東電福島原発事故にちなんだ催しが、3月11日前後に繰り広げられました。4月26日のチェルノブイリ原発事故記念日まで、イベントを続ける団体もあります。

日本人がドイツで結成した公益法人「さよなら原発デュッセルドルフ=SGD」（ドイツでの脱原発活動は、「公益」とみなされるのです!）も、2月に「おしどりまこさんの講演会」、3月に「日本のママデモのみなさんとのデモ」と「樋口健二さんの講演会」を開催しました。

また、SGDにはドイツの市民団体から、3.11の記念行事に際して出張講演の依頼もありました。私は、これまでに福島県内の取材も行い、「公害・環境問題と東電福島原発事故」という共著も出版していて現地の状況に詳しいので、行ってお話をしてきました。

日本で脱原発のために活動されているみなさんに、SGDのような国外の日本人による活動についても、ぜひ知っていただきたいのでご報告します。

＊おしどりマコさんの講演会（2月19日 Aachen アーヘン市）＊

今年の2月NNNのドキュメンタリー番組で、その活躍が一層広く知られるようになったおしどりマコさんは、おしどりケンさんと共に2014年から毎年ドイツに招聘され、国際会議や各地の団体、学校などで講演を行なってきました。（DAYS JAPAN2017年4月号にマコさんの記事「ドイツで実感・日本の原発事故放置」があります）。この記事からもわかるように、行政機関や核廃棄物処分場など、マコさんはドイツでの取材にも徹しています。

SGDでも2014年と昨年に、地元のデュッセルドルフでマコさんの講演会を開催しました。

そして、今年の開催地は国境都市アーヘン。60km余りしか離れていない隣国ベルギーの老朽欠陥原発廃止の訴訟を、周辺諸国の自治体と進めています。カール大帝の大聖堂でも有名なアーヘン市の、3Rosenというエネルギー政策転換推進団体と共同開催でした。

3RosenとSGDとは、昨年の秋にリンゲンという北部の都市の核燃料供給工場閉鎖を求めるデモで知り合い、「フクシマから6年」の記念行事を共同で行なおうと意気投合したのです。

余談ながら、この原稿を書いている最中にも、ドイツはベルギーの老朽欠陥原発に核燃料を輸出しました。だから、ドイツの反原発市民たちは、「政府の脱原発は中途半端だ!」と怒っているのです。

講演会の話に戻ります。ベルギーのドイツ語圏からの参加者も含めて、予想を大幅に上回る120名の聴衆が、東電の広報担当者よりも詳しいと言われるマコさんのフクシマ・レポートに耳を傾けました。

休憩時間に、マコさんに「（福島の人々の）苦難はどれだけ長く続くのか？今彼らを助けるためには何が出来る？どうすればいい？」と話しかけていた、ドイツ人男性の沈痛な面持ちが忘れられません。



アーヘンに来る前に訪問した行政機関「ドイツ物理工学研究所」で入手したという、放射性物質測定データの説明をするマコさん。福島原発由来の半減期 3.3 日のテルル 132 がドイツで検出されていました。

講演会は日独の文化交流も兼ねており、休憩時間には、協賛してくれたアーヘン市の合気道協会の実演、ドイツ人手作りのお菓子とコーヒー、日本人手作りのお寿司やおにぎりや日本茶も、堪能してもらいました。その後は、再びマコさんとの質疑応答。

講演会の詳細については、栗田路子さんの「フクシマから、学ぼうとするドイツ人 忘れ去ろうとする日本人」という記事や録画をご覧ください。 (*文末参照)

＊ママデモさんたちとのデモと樋口健二さん講演会 (3月11～12日 デュッセルドルフ Düsseldorf 市) ＊

SGD は 3. 1 1 記念日とその翌日、原爆労働者の写真を撮り続けておられる樋口健二さんと、樋口さんの活動を支えながらデモ活動をされている「ママデモ」のメンバー 3 名が日本からいらしたので、デモと講演会を開催しました。

ママデモのみなさんは、昨年 10 月に樋口健二さんと小出裕章さんとの「世界が核で滅びる前に ～日本中で原発廃炉の波を起こしたい～」 (一橋大学) というイベントも主催したそうです。

私自身はデモには参加できませんでしたが、福島原発告訴団団長の武藤類子さんから寄せられたメッセージも、日本語とドイツ語で読み上げられました。

翌日は、「四日市公害」、「毒ガスと島」、「アジアの原発労働者」などをテーマに、半世紀余りにわたりフォト・ジャーナリストとして国際的に評価されてきた樋口健二さんの講演会でした。

定期検査中の原発内部の取材は NHK でも断られていたそうですが、粘り強く交渉して 1977 年に 1 時間だけ入ることが許された時の貴重な写真があります。半面マスクでは眼 (水晶体が被曝し

やすい) が保護されていません。「今日だけマスクをつけろ」と言われて一人分足りず、木綿のマスクしかつけていない人もいます。

原発は、60万人ともいわれる被曝労働者の犠牲の上に動いています。過酷な労働条件下で被曝しても労災認定されなかったり、600万円で裁判が潰されたりした理不尽な差別社会を、樋口さんは写真という形で報道してきたのです。



樋口さんの講演会にも日独120名の聴衆が来てくださり、椅子を追加しても会場の外まであふれていました。

講演会後には、3月10日に80歳の誕生日を迎えた樋口さんのお祝いパーティーもありました。

「エコトープ」という名の会場は、デュッセルドルフ市民が30年前に工業地帯がこれ以上増えないようにと、総合的な環境計画に基づいて16haの土地を緑地の豊かな住宅地とした、プロジェクトセンターでもあります。緑地の大部分は、公園と60戸分の会員制区画ガーデンなので、600戸の住民だけでなく、60家族が庭の手入れに訪れ、周辺住民の散歩道でもあります。

この会場内の樋口さんの写真展は、6月まで3ヶ月間、写真を入れ替えながら続きます。

SGDのメンバーの活動については、以前記事(*文末参照)にも書きましたが、あえて繰り返しましょう。一連の催し事の成功は、チラシやポスター作成、日本からの来客の送迎や宿泊の世話、会場や飲食物の準備、司会や通訳、動画の撮影編集、そのほか表にはでてこない大小様々な多くの努力と苦勞とチームワークの賜物なのです。

以上のようなSGDの催しの動画(*文末参照)がありますので、みなさんもぜひご覧になってください。

***ドイツでの講演報告**

(3月10日シュタットハーゲン Stadthagen 市、3月11日アーヘン Aachen 市) *

最後に、SGD が依頼を受けて上記 2 ヶ所の自治体に講演に出かけましたので、その模様を報告します。

まず、人口 2 万人余りのシュタットハーゲンでは、37 km しか離れていないグローンデ原発建設の反対運動が 40 年前に起きましたが阻止できませんでした。今は老朽化にもかかわらず稼働延長した原発の、即時停止を求めた運動が続いています。

30 名近い参加者に 2 時間以上話し、その後質疑応答と、とても内容の濃い情報提供ができました。新聞が講演の開始時間を 19 時半でなく 9 時半と書き間違えたので聴衆が少なかったと、皆さんがっかりしていました。

ドイツ人には、フクイチの収束も見通しが立たないのになぜ日本は再稼働を続けるのかが理解できないようなので、日本の縦割り官僚政治や原子カムラの説明が欠かせません。「原子カムラ」については、ドイツ人ロベート・ユンクの著書「原子力帝国」（1977 年、邦訳あり）を例に出すと、わかりやすいようです。

シュタットハーゲンの住民は、原発からの距離が近いだけに危機感がとても強く、福島市の庭先の除染ごみや仮置場の写真、甲状腺がん多発、強制的といえる帰還政策など「明日は我が身かもしれない。1 日も早く原発を止めなければ」と、とても強い関心を示してくれました。また、「この場合、この政治ならどうするだろうか」などと、互いに語り合ってもいました。

SGD が 10 日のデモで読み上げた武藤類子さんからのメッセージ（*文末参照）は、3.11 後の 6 年間について重要事項がとてもわかりやすくまとめられているので、私も講演の最後にドイツ語訳を朗読しました。このメッセージは、翌日シュタットハーゲン市内の広場で開かれる「3.11 から 6 年」の集会でもぜひ読んで配布したいと、たいへん喜ばれました。

20 代くらいの男性が、帰り際に私にこう語ってくれました。

「日本政府が、放射線量が高くても福島市などの大きな都市の住民を避難させませんが、グローンデ原発が事故を起こしたら、ドイツ政府もきっと同じことをするでしょう。ハノーファー（約 50 万人）やハンブルク（約 180 万人）の住民をどこに避難させられると思いますか。どこにも移住させる場所がないから、日本政府のように安全だといってそのまま住まわせるでしょう」。

次に、3 月 11 日のアーヘンでの講演は、SGD とマコさんの講演会を共催した 3Rosen による地元の教会での文化イベントの一環でした。まず午後からお菓子やケーキを持ち寄って、子供連れのためのゲームなどでスタート。

夜の部の漫才やコンサートの前座のような形で、私の 3.11 の話と 3Rosen の 7 年前の成り立ちの話がありました。家族イベントの後だったためか、小さな子どもさん連れの保護者など 50 人くらいが聴いてくださり、地元新聞の取材も受けました。

持ち時間が 30 分しかなかったので、武藤類子さんのメッセージを読み、シュタットハーゲンでも紹介した日本の原発反対運動の様子を写真で観ていただきました。

私が書いた、「青柳行信さんの九電本店前テント村」、「島田雅美さんの九電大分支店前での抗議行動」が 2000 日を超えたという記事（*文末参照）と写真は、ドイツ人にも大きな感銘を与えました。



子どもたちは何をしていますのでしょうか？実は、「核廃棄物」の缶を積み上げているのです。



こういう手作りの遊びで、大人よりも長い間「核廃棄物」のお守りを押し付けられる子どもたちは、憂さを晴らして(?) いるのでしょうか。

昨年夏の伊方原発再稼働に反対する全国集会には、青森から沖縄までおよそ700人が集まり、その時の写真も見てもらいました。

伊方原発入口まで延々と続くカーブと坂の一本道や、猛暑の中を長袖の制服とマスク姿で数時間道路上に立ち続けた大勢の警官の写真を次々と映すと、観客からはただただ驚きの表情やため息のような反応が繰り返されました。

両方の講演会で、写真を見たあと必ず質問されました。

「なぜ高齢者ばかりなのか。日本の若者や子どもたちは、なぜいないのか」。

私は、「SEALDsのような若者たちの積極的な社会活動が生まれてきてはいるものの、ドイツとは異なり、受験のための塾通いで忙しいことや日曜日に買い物ができること、勤務時間が長いので社会活動の余裕がないことなどの、時間的な制約が大きなハードルではないだろうか」と答えました。

皆さんなら、なんと回答されますか。（了）

*本文の中で（*文末参照）として紹介した記事や動画は、「メディア」欄の以下のサイトからご覧ください。

* [武藤類子さんのメッセージ](#)

* [SPEAK UP OVERSEAs 海外在住ライターによるウェブ言論メディア](#)

* [Sayonara Genpatsu が主催したデモや講演会の動画サイト](#)

* [「原発止めよう！」、九電本店前テント村の2千日（青柳行信さん）](#)

* [九州電力支店前で脱原発を訴えて2000日（島田雅美さん）](#)